

特集

江戸袋物の粹 その金工金具 について 〈2〉

江戸風俗研究科 平野 英夫

前回(第20号)女性用懐中鏡入の胴締メ鎖金具や、男性用紙入れの板鎖等をご紹介したが、今回は煙草入れを含めた袋物の前金具部分にスポットをあてて解説したいと思う。

その1 女性用袋物

煙草入れ

は深緑羅紗地に金糸・黒糸で笹と齒黒蜻蛉を刺繍で表現した豪華な筒提げ煙草入れ。はその前金具の拡大写真。枝柿図で、柿の実の部分を珊瑚で象る。地の枝・葉の部分を赤銅で打出し、葉の一部に金・銀を被せアクセントとしている。

は煙管筒と呷(袋)とをジョイントとする鎖部分の拡大。銀の綾鎖と鍍金の小豆鎖を交互に置き、緒メの鍍金の三日月と呷部分の流水に珊瑚と桜を散らし、春・夏・秋の趣向となっている。この煙草入れのもう一つの見所は、被せの付いた外入れが付属していることである。がそれで、薄茶吉祥文の錦地に相良縫の散縫を施し、古代紫真田織の胴締メで締め、付属の匂袋も吉祥文で統一。は外入れ前金具の拡大。珍しい筒守をデザインしたもので、赤銅地に七宝・瓢を透かして、菊・唐草文は線象嵌で施している。

紙入れ

は鶯色地に牡丹文と菱・丸の源氏車を綴れ織で表出した紙入れ。前金具は銀の打出し彫りで鳳凰を丸形にまとめた大形金具。いかにも御殿好みの雰囲気醸し出される作品である。

その2 男性用袋物

紙入れ

は古渡唐花文インド金更紗で、極めて大形の紙入れ。両面に被せが付き三ッ折の形式を取る。かなり上手の紙入れで、このように時代の上がる伝世品は少ない。の前金具は水禽を四分一の板で切り抜き毛彫りを施す。はその裏側被せ。棒状の形を半円形に曲げた斬新なデザイン金具、赤銅の艶のある黒みが目を引く。

は濃緑羅紗地の紙入れ。前金具は金の打出し彫りで上り藤紋を象る。細部まで塹の冴えが行届き、名工の片鱗を窺い知れる作品。武家持の気品ある逸品である。はその拡大。

は水色羅紗地の大形紙入れ。相良縫と刺繍で竜宮から宝玉を奪い取るという玉取姫伝説を圖案化。眷属である鯛を大きく大胆にデザイン。が前金具の拡大で、大鯛を素銅地で打出し、ユーモラスな表情ながら吸盤・足の細部など行届いた仕事が伝わってくる作品である。

はオランダ金唐草の紙入れの表部分。前金具は芝山派の得意とした象嵌で、貝や七宝、瑪瑙などで花蝶文をあらわす。金唐草の黒地と金具の象牙色が絶妙のコントラストを与えている作品である。は拡大写真。は横細長の紙入れ。緑羅紗地の燕口という外入れの付属した紙入れで、赤銅地に加賀象嵌で蟻螂・蝶・ばった等虫尽でまとめる。白羅紗に良く映える金具である。は拡大。

は素銅地に平象嵌で宴遊の席をシルエット状に象る前金具。持手の粹な好みがよく表わされている。

は洲浜・八角・扇面・菱・円窓形を赤銅や四分一などの地金でそれぞれ重ね合せ、笹や鳥、花や幾何文などを平象嵌で象った手の込んだ前金具で、象嵌の見本と言って良い好ましい作品である。



懐中煙草入れ

は主に武家が好んで用いた煙草入れの形式。全体を相良縫の散縫と縫潰しによって大輪の花文を大胆に施す。被せを開けると、段口の部分から煙管を滑りこませるように袋に収納出来る形式。吸口を1センチ強程外側に出して煙管を取り出し易くするのが特徴。②被せを開いて煙管が収納された状態。②は前金具の拡大。大きめの前金具で、鶴に雲間に旭日というお目出たい図柄。銀の打出し彫りで金・赤銅を施し贅を凝らす。

③のこの形式も、主に武家階級が使用する懐中煙草入れ。無地菖蒲草の呷に金茶地伍紹服連の筒が添えられている。④は前金具の拡大。四分一地の小柄の様な大金具で、猛り狂う波濤を、彫り崩しの技法で見事に表現。波の裏側も鑿で彫り崩され、より立体空間を表出。また、波の飛沫も極小の金の玉で象嵌。大森派の名工の作であることは間違いなさであろう。

根付両提げ煙草入れ

これから紹介する煙草入れは、町人使用のものであるが、特に侠客や口入れ屋、鳶の組頭や大工の頭領など、男達を気取る稼業の人々が提げた物。

⑤は役者絵の白浪五人男など、男達姿の役者が腰に提げているのがこの種の煙草入れ。特にオリジナルなものの伝世品は非常に数が少ない。朱漆で塗った革で仕立てられ、根付によって呷・筒の両方を、鎖あるいは紐で提げるようにした形式から両提げと呼ばれている。全体の取り合せも、根付の狼の牙や、前金具、緒メの唐獅子など、より武張った好みに仕立てられている。⑥が前金具の拡大。黄銅の容彫りで、桃山期と想われる古後藤の大金具。元々は馬の鞍の前・後部分に取り付けられていたと想われるが、近世に入り前金具に転用されたものであろう。非常に作行も良く、躍動感もあり佳品である。

⑦も男達好みの煙草入れ。呷はオランダ金唐革の蝸牛手と呼ばれる高級な金唐革を使用。煙管筒は杉立菖蒲草。根付・前金具で龍・虎の取り合せ。⑧は前金具の拡大。狩野派を想わせる虎を銀の打出し彫りで表し、天空を見据える表情も生々として素晴らしい。また⑨の四分一地の裏座、竹虎図も彫技優れ、

両金具共無銘ながらかなりの巧手である。大形の饅頭根付は、白銅地に片切彫りで丸籠を象り、前金具と対比させている。幕末の名工と知られた赤城軒泰山元孚(三代)の作である。

筒差し煙草入れ

煙管筒に呷を提げる形式のもので、この形がごく一般的。⑩は男達風を気取るためか、通常より大形に仕立られている。これも高級な人形手と呼ばれる金唐革(エンジェルが打ち出されたイタリアルネッサンス期のもの)を使用。⑪の前金具は素銅地打出し彫りに、赤銅・金を被せた非常に珍しい“筒差し煙草入”の図。使い手の好みが如実にあらわれた一品である。

最後に浮世絵に描かれた煙草入れ図をご紹介したい。⑫は葛飾北斎が描いた摺物。虎の毛皮を一ツ提げ煙草入れに仕立てたもの。前金具は銀で、山の字を透し、デザイン化したもの。文化三年(1806)の年記があり貴重な資料といえよう。⑬図は歌川国久描く張交絵の一部。江戸の土地・名所を狂句と浮世絵で関連付けたもので、“表は虎の金かなもの裏座は四分一の銀座”というように、煙草入れの裏座を銀座と詠ませているところがミソ。

⑭はこれら前金具を作った彫金家の仕事場風景を描いた貴重な一図である。明治28年に発刊された文芸雑誌「文芸倶楽部」の見開き絵に使用されたもので、作者は明治・大正期に活躍した渡辺省亭。幕末から明治期にかけての彫金家の仕事場の様子で、ケヤキ造りの厚手の仕事台には、鑿・筆・ブラシなどが並べられ、金属粉を受ける捏ね鉢まで覗く。また口板に脂棒を膝で固定し、左手に持った鑿を芋鋸でトントンと叩く様子や指の描写が素晴らしく、仕事場の風景が目の前に浮かぶ様である。

今回はこれで終えるが、また機会があれば、別の切り口から金工金具について述べてみたいと思う。

平野 英夫 (Hirano Hideo)

1947 東京日本橋生まれ

1966 東京都立工芸高等学校金属工芸科卒業

1972 ジュエリーデザイン・クラフトマンとして独立

1985 江戸東京黒門塾の師範を務める

2005 ドイツ文化会館での日独シーボルトシンポジウムにて公演

仕事の傍ら江戸コレクションの充実にも努め、リッカー美術館、菱川宣信記念館、サントリー美術館のほか、日本橋高島屋などでもコレクション展を開催。



22

21



30



31



23



24



32



25

26



33



28

27



29



34